平成25年5月10日発行（毎月10日発行）　第26巻　第5号　通巻314号　ISSN1348-4885

J-Vet

New Generation!

2013 May 5

Clinical Mechanism

猫の非ノミ誘発性アレルギー性皮膚炎

Compendium

非心原性肺水腫

New serial

メカニズムから読み解く臨床検査データ

診断力を磨く！緊急疾患対応シミュレーション

Veterinary Movement

Serialization

J-VET ANTENNA
最新獣医学論文から

イラストで知る眼科診療　眼からウロコ

ウサギの臨床テクニック

写真で覚える！　血液塗抹標本の見方

Veterinary Arts

日本獣医夜明け塾～免疫研究から獣医療を変える～

いぬがく update

interzoo

Veterinary Movement

Doctor's interview

ゆう動物病院
森本真一郎先生に訊く

はじめに

近年，動物の長寿化や飼育環境の変化，品種の多様化等，さまざまな要因により，臨床現場で遭遇する疾患は複雑化の一途を辿っている。それらに対応するための検査技術や知識，治療手技も高度化しており，動物の飼い主からもそれらを求められるようになってきている。

そのようななか，獣医療の世界でもさまざまな認定医制度が設けられ，飼い主のニーズに対応し，学術的にも確かな治療を提供できるようにするためのシステム構築が模索されている。

今回，昨年に日本獣医皮膚科学会の皮膚科認定医の資格を取得された，ゆう動物病院 森本真一郎 先生に，その取得の経緯や皮膚科への思い，またプライベートの過ごし方など，ざっくばらんにお聞きした。

ゆう動物病院

京都駅から程近い，油小路九条交差点近くにあるブラウンのレンガ調のモダンな建物がゆう動物病院である。看板に描かれた愛嬌あるライオンのマスコットが，訪れた人を迎えてくれる。ゆう動物病院の名前の由来を森本先生にお聞きしたところ，優しさの「優」，有効の「有」，悠々の「悠」，友人の「友」，結ぶの「結う」，はたまた「YOU」や「言う」など，さまざまな意味を含んでいるとのことで，そのどれでもありたいと願っているとのことだった。森本先生は，「抜苦与楽」を実現できる想像力と実行力のあるホームドクターを信条としている。また，「誠実な医療」と「真心のホスピタリティ」が 僕たちの目指す所ですと語り，「普通のことをどれだけ普通でないレベルでできるか」ということに力を入れておられ，ゆう動物病院に初めて来院された方は，飼い主さんに限らず同業の獣医師の先生でも，ゆう動物病院のマメさや丁寧さに驚かれることが多いようである。実際，病院内には飼い主向けのさまざまな獣医学情報や案内が丁寧に掲示されている。また毎月のインフォメーションのほかに「ゆう動物病院新聞」という冊子も毎年発行しており，飼い主さんとのコミニュケーションを非常に大切にしていることがうかがわれた。新聞には，病院で行っている治療の情報や疾患の解説などはもちろん，病院での出来事なども面白く紹介されているほか，飼い主さんからの質問にQ&Aで答えるなど，大変充実している。

今年，ゆう動物病院は開院から10周年を迎え，さら

病院外観
ライオンのマスコットがお出迎えしてくれる。

院内・外ともに飼い主さん向けのインフォメーションが充実している。

今回，お話を伺った森本先生。受付には皮膚科認定医の認定証も掲示されている。森本先生は京都で最初の皮膚科認定医取得者の一人である。

エコー（Logiq-P6），電子内視鏡，ICU等，院内にはさまざまな最新設備が完備されている。

なる飛躍のため，ハード・ソフトさまざまな面でバージョンアップを図りたいとのことで，森本先生には今後のさまざまな構想がある様子であった。

皮膚科への興味と魅力

森本先生は奈良県のご出身で，大学は宮崎大学をご卒業されている。獣医師になるというのは小学校4～5年の頃には決めていたそうだ。当時は，とにかく動物が好きな子どもで，鳥や，カエルなどの両生類，魚類まで含めて200匹ほどの動物を飼育していたとのことで，もっと動物たちを長生きさせられないか？　と真剣に考えた結果が獣医師という職業を志したきっかけだったそうである。

大学では病理学研究室に所属し，卒業後は大阪の動物病院で勤務医を5年ほど経験されたとのことで，その間，整形外科やエキゾチック診療などのトレーニングも積まれている。いろいろとご経験や勉強をされていくなかで，森本先生が興味をもったのは皮膚科であった。新人時代に方々の学会・研究会やセミナーに参加するなかで，皮膚科の講演，とくに永田雅彦先生の講演に興味がひかれたという。森本先生自身，もともと皮膚科が好きというのもあったが，なにより永田先生の皮膚科に関心をもたせる語り口や解説の巧みさに惹かれたところもあったとのことで，ある意味このときの出会いが後の認定医取得につながった部分もあるのであろうか。

森本先生は皮膚科の魅力についてもいろいろとあげてくださり，「ほかの診療科と比較して，患者さんとやり取りをしながら診療を組み立てなければいけないケースが多いと思います。患者さんの悩みを聞いたり，また痒みなどの症状の評価にしてもコミュニケーション能力が重要となり，そういうところが僕にはとても面白いですね」と力強く語ってくれた。また，「皮膚疾患というと，すぐに命にかかわるというものは多くないかもしれないけれど，動物の皮膚・皮毛というのは，飼い主さんが触ったり，抱いたり，動物と触れ合う際に非常に重要な部分であり，人と動物の関係性に大きな影響を与えています。そういう意味でも，とてもやりがいを感じていますね」と述べていただいた。

ゆう動物病院新聞
10ページにもわたって，病院での一年間の出来事や森本先生自身の総括，手術記録のほかQ&Aコーナーなども掲載された充実の内容となっている。森本先生が描いた漫画も読める。

本年3月17日に開催された日本獣医皮膚科学会 第16回学術大会にて，「Canine sterile neutrophilic dermatosisを疑ったオーストラリアンケルピーの1例」を発表する森本先生。

皮膚科認定医の効用

勤務医のときから，得意分野をつくるなら皮膚科と決めていたという森本先生。獣医療で出会う疾患も高度・複雑化するなか，いわゆるジェネラリストと専門医をつなぐ存在である認定医を育成する制度が発達してきたのは必然ではないかと森本先生は述べている。皮膚科でも，近年犬アトピー性皮膚炎や食物アレルギーなど，免疫の関係した複雑な病態が増加しているが，専門医に紹介するにしても，飼い主さんへの適切な病態の説明や治療プランの提示，また専門医との情報のやりとり等に一定以上の知識や技能が求められることになる。その役割を果たすことができる認定医の存在は重要であろうと考えられ，よい制度だと思うと森本先生は語ってくれた。

認定医になることを希望する者には，取得するまでの過程のなかで，学会での発表や論文提出なども求められる。森本先生自身も，それまで雑誌への記事投稿などはしていたものの，あまり論文の執筆などはしていなかったとのことで，いざ書いてみると，科学的な思考のプロセスを再確認するのに非常に役立ったとのことである。また，認定医取得のための勉強のなかで，思考を積み重ねるための元になる知識・情報もすごく広くて，自分の知らないことがまだたくさんあるのだということが，取得過程で理解できたとのことだった。通常，大学を卒業してしまうと，このような経験を臨床の場だけで積むことは難しいため，一般臨床医にとって，とてもよい仕組みになっていると森本先生は説明してくれた。

森本先生は，「認定医は専門医とは全然違うけれど，それでも一定の力はあると認められたもの，空手でいえば黒帯（初段）を取ったようなものでしょうか。認められた者であるという自負と，下手な診療はできないというプレッシャーの両方があります」と語る。そのため，認定医を取得した今，より一層力をつけていきたいとのことであった。その一環として，本年3月17日に大宮ソニックシティにて行われた日本獣医皮膚科学会 第16回学術大会にて，森本先生は「Canine sterile neutrophilic dermatosisを疑ったオーストラリアンケルピーの1例」を発表している。学会での発表も，診療時になぜこの検査の結果はこうなったか？　なぜこの治療を行ったか？（または行わなかったか？）など，自分自身の診察のプロセスを科学的に考えるトレーニングになるとのことで，こうした経験もさらに積みながら学び，より診療に活かしていきたいと語っていただいた。

今後の方向性

森本先生に，最近関心のあるカテゴリについてお聞きすると，「スキンケアの充実化に興味がありますね」とのことだった。アトピー等の増えるなか，シャンプー療法やセラミド，フィトスフィンゴシンといったものが注目されている。飼い主さんに渡してみて効果が出ないこともあるが，飼い主さんの自宅でのちょっとした使い方の勘違いを正したり，コツを伝授するだけでも，劇的に効果が上がる場合もあるという。そういった部分も上手に伝える話し方，また飼い主さんから情報を引き出す技術をさらに磨くとともに，シャンプーをはじめとしたスキンケアを，院内で飼い主さんと一緒にやってみるといったシステムづくりも今後行っていきたいとのことで

あった。

認定医を取得して，より一層皮膚の世界が自分のなかで広がったという森本先生。「“皮膚は内臓の鏡”ともよばれ，さまざまな要因が絡む疾患が多く簡単ではないけれど，だからこそ面白いですね」と語り，今後，皮膚につなげて勉強していくこととしては，やはり腫瘍だと思うとのことで，そちらの勉強もしていきたいと仰られていた。

そこで，森本先生に，それでは腫瘍の認定医取得も目指されますか？　とお聞きしたところ，「むしろ自分ではなく，ほかのスタッフに取得を目指してほしいですね」とのお答えだった。ひとりでいくつもの認定医をもつのは，なかなか厳しいと思うと述べられ，やはり自分は基本的にジェネラリストであるので，一人でいくつもの認定医をもつのは「その能力の維持・発展」も考えるとなかなか難しいと思うとのことで，できれば他のそれぞれのスタッフに，それぞれの強みをもってもらうのが，病院のためにも患者さんためにもよいだろうと強調されていた。

プライベートの過ごし方は？

皮膚科認定医を取得され，診療にも学術活動にも余念のない森本先生だが，そんな先生のプライベートについてもお聞きしてみた。

趣味は，絵を描いたり書道をしたりといった創作活動のほか，地域の食べ歩き，読書（漫画から大衆誌，東洋哲学などの思想書ほかいろいろ読まれるとのこと）等々多彩でいらっしゃるが，特筆すべきは長年やられている格闘技であろう。

伝統空手を小学4年生のときに始められ，高校時代に芦原空手に入門。その後，極真空手や総合格闘技（ヴァーリトゥード）など，打撃・組み技・武器を問わずご経験され現在に至っている。今でも，もちろん練習は毎日されており，ジムでのトレーニングも週1～2回，道場には月1回かかさず通っておられ，合宿にも毎年参加されているという。

道場での練習は，基本的に防具なしのフルコンタクトでスパーリングを行うとのことで，組み技の練習もあり，毎日練習していないとついていけず大変，と仰っていた。「この前もちょっと靭帯を伸ばしちゃって……」と語る森本先生だが，表情はなんだか楽しそうである。

現在師事している空手の先生は，電話帳はおろかレンガでもちぎることができるのだが，そういう力は使わずとも脱力して浸透する打撃や，組んで相手の力を抜いてしまうマンガのような達人だそうである（電話帳くらいなら僕でも裂けるけど……とは森本先生談）。森本先生は今の先生に師事して，大事なのは「力」ではないのだなと悟ったという。それこそ，若いうちはガンガン筋トレをしてウエイトアップして……という感じだったそうだが，今ではほとんどやらなくなったそうだ。普段の練習は型・サンドバック中心で，体の使い方を意識すること，力を抜くという境地に至ること，に重きをおいているそうである。大学時代がむしゃらに体を鍛えに鍛えていた頃よりも，今の自分のほうが強いと思うと仰られ，「人間の体の使い方ひとつでこんなに変わるんだ，というのが空手・格闘技をやっていて面白いところですね」と語ってくれた。

「誠実な医療」と「真心のホスピタリティ」が 僕たちの目指す獣医療です，と力強く語っていただいた。

余談であるが，空手で自分を鍛えることで，診察時にも自分の気持ちに余裕が出てくるという効果もあるとのことで，力を抜く境地がここにも活かされているのかもしれない。仕事と趣味の間で，よい相乗効果を生んでいらっしゃるのが感じられた。

おわりに

今回，森本先生には皮膚科認定医取得の経緯やプライベートについて伺った。

病院は開院10周年を迎え，自身も皮膚科認定医を取得された森本先生。認定医は黒帯取得であると語る森本先生は，これからも皮膚科診療ならびに空手の腕前を磨いて自身を高め，獣医師としても格闘家としても発展していかれるのだろうなと強く感じさせられ，また，そんな森本先生の姿勢に心を打たれた取材となった。

（編集部／小原）